

名詞句からの外置に関する制約について

梶原 英二

1. 序論

英語には移動という現象がある。よく知られているのが、以下に示すように、ある要素が左側に移動している場合である。

- (1) a. $What_{t_1}$ did John see t_{t_1}
 b. $John_{t_1}$, I don't like t_{t_1}
 c. $John_{t_1}$ was loved t_{t_1} by Mary

(1a)では、元々目的語の位置(t_1)にあった $What_{t_1}$ が、左方移動(wh 移動)している。(1b)では、元々目的語の位置(t_1)にあった $John_{t_1}$ が、話題化を受けて、主語の前に左方移動している。(1c)では、元々目的語の位置(t_1)にあった $John_{t_1}$ が、受動化を受けて、主語の位置に左方移動(NP 移動)している。一方、これに対して、ある要素が右側に移動している場合がある⁽¹⁾。

- (2) a. A review [of this book] will appear shortly
 b. A review t_{t_1} will appear shortly [of this book]₁
- (3) a. A man [that no one knew] came into the room
 b. A man t_{t_1} came into the room [that no one knew]₁

- (4) a. John read a book [by Chomsky] over the summer
 b. John read a book t_i over the summer [by Chomsky]_i

(2b)では、名詞 *review* の補部である前置詞句 *of this book* が文末に右方移動している。(3b)では、名詞 *man* を修飾している関係詞節 *that no one knew* が文末に右方移動している。(4b)では、名詞 *book* を修飾している前置詞句 *by Chomsky* が文末に右方移動している。(2b)と(3b)は、主語位置にある名詞句から、前置詞句や関係詞節が文末に右方移動している場合である。一方、(4b)は、目的語位置にある名詞句から、前置詞句が文末に右方移動している場合である。(2b)、(3b)、そして、(4b)のような右方移動は、名詞句からの外置(Extrapostion from NP)と呼ばれ、これまでに様々な研究がなされてきた。⁽²⁾

本論文では、名詞句からの外置が右方移動であるという立場を採り、主語位置にある名詞句からの外置はIPに、目的語位置にある名詞句からの外置はVPに付加するものとする。⁽³⁾この前提に基づいて、本論文では、名詞句からの外置に関する制約について考察していく。

2. 統語論的アプローチ

2.1. 境界節点による分析

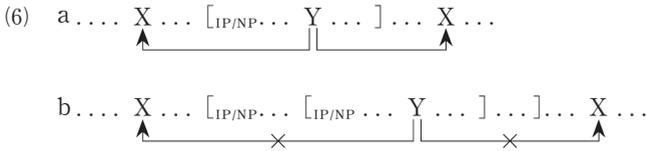
ある要素が移動するとき、その要素がどれくらい移動できるかを規定する条件がある。それが下接の条件である。下接の条件は、以下のように規定することができる。⁽⁴⁾

- (5) Subjacency Condition

Movement cannot cross more than one bounding node, where bounding nodes are IP and NP

(5)の下接の条件の特徴は、移動に対する境界として機能する境界節点を

IP と NP という二つの範疇に固定していることである。この条件により、移動が一つの境界接点を越える場合、その移動は容認される。そして、移動が二つ以上の境界節点を超える場合は、その移動は容認されない。このことを図で表すと、(6)のようになる。(6a)のように、境界節点を一つ越える移動は容認されるが、(6b)のように、境界節点を二つ越える移動は容認されない。



この条件を、(1a)と(2b)の例文で確かめてみよう。(1a)と(2b)の構造は、それぞれ、以下のようになる。

- (7) a. [_{CP} What_i did [_{IP} John [_{VP} see t_i]]]
 b. [_{NP} A review t_i] will appear shortly [of this book]_i

(7a)の移動は境界節点 IP を、(7b)の移動は境界節点 NP を越えて移動しているのです、下接の条件を満たしている。その結果、(7a, b)は適格な構造となり、これらの文が文法的であると正しく判断される。

次に、下接の条件によって排除される例を見てみよう。⁽⁵⁾

- (8) a. [That a review [of this book] came out yesterday] is catastrophic
 b. * [_{CP} That [_{IP} [_{NP} a review t_i] came out yesterday]] is catastrophic [of this book]_i

(8a)の前置詞句 *of this book* が、文末に右方移動したのが、(8b)である。この移動は、境界節点である NP と IP を越えているので、下接の条件の違反となる。よって、この構造は不適格となり、(8a)の非文法性が説明される。

しかし、以下の例文が示すように、境界節点による下接の条件を用いた分析方法には問題がある。

(9) [_{CP} Who_i did [_{IP} John see [_{NP} a picture of t_i]]]

(8b)と同様に、(9)の *Who_i* は、NP と IP の二つの境界節点を越えて移動している。よって、下接の条件に違反し、(9)は非文となるはずである。しかしながら、この文は文法的である。つまり、境界節点による下接の条件では、(9)の文法性を説明できないのである。このことから、移動に対する制限として境界節点のある範疇だけに特定することには問題があると言える。

2.2. 障壁による分析

障壁とは、ある要素の移動を妨げる範疇を相対的に決めるものであり、Chomsky (1986) によって、提案された概念である。障壁に関する定義は、以下のようになっている。⁽⁶⁾

(10) Barrier

γ is a barrier for β iff (a) or (b):

a. γ immediately dominates σ , σ a BC for β ;

b. γ is a BC for β , $\gamma \neq \text{IP}$

(11) Blocking Category (BC)

γ is a BC for β iff γ is not L-marked and γ dominates β

(12) L-marking

α L-marks β if α is a lexical category that θ -governs β

障壁には、阻止範疇を直接支配する最大投射範疇が障壁となる場合(10a)と、阻止範疇である最大投射範疇自体が障壁となる場合(10b)がある。前者が継承障壁であり、後者が固有障壁と呼ばれている。IPは、例外的に、阻止範疇であっても、固有障壁にはならないと規定している。

下接の条件も障壁に基づいて定義される。⁽⁷⁾

(13) Subjacency

β is n -subjacent to α iff there are fewer than $n+1$ barriers for β that exclude α

(14) Subjacency Condition

If (α_i, α_{i+1}) is a link of a chain, then α_{i+1} must be 1-subjacent to α_i

(14)の下接の条件により、移動が障壁を二つ以上越えると、その移動が不適格になることになる。

障壁による分析を、(2b)と(8b)の例文にあてはめてみよう。(2b)と(8b)の構造は、それぞれ、以下ようになる。

(15) a. [_{NP} A review t_i] will appear shortly [of this book]_i

#(= barrier)

b. *[_{CP} That [_{IP} [_{NP} a review t_i] came out yesterday]] is catastrophic [of

#

this book]_i

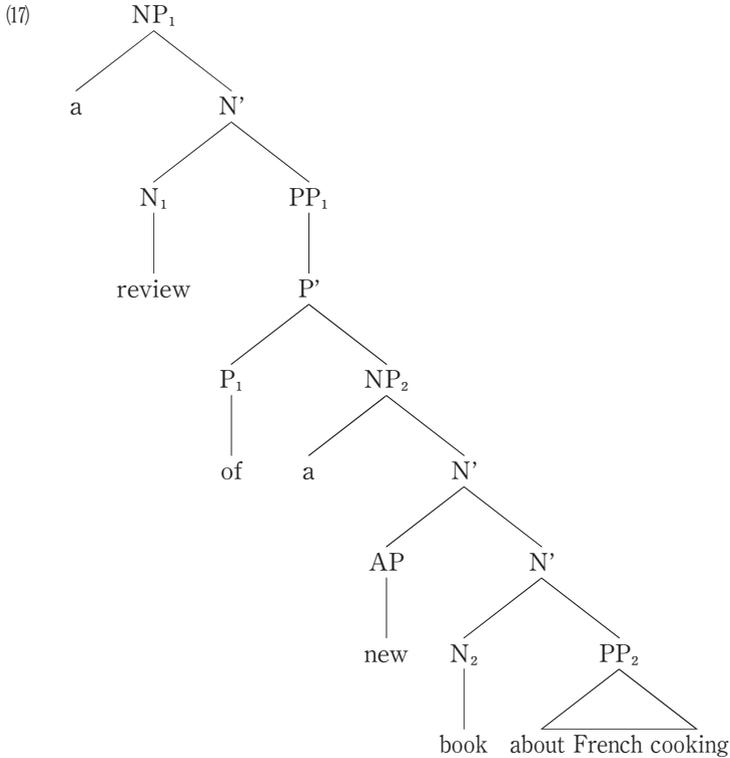
(15a)において、主語位置にある[_{NP} A review t_i]はL標示されないので、

障壁となる。したがって、前置詞句 *of this book* の移動は障壁を一つ越すことになる。そのため、この移動は下接の条件を満たしている。よって、(15a)は適格な構造となり、(2b)の文法性が説明される。(15b)において、主語の中に埋め込まれた節の主語にあたる [_{NP} *A review t_i*]はL標示されずに、障壁となる。そのNPを直接支配するIPは、(10a)により継承障壁となる。さらに、主語位置にある節のCPは、L標示されていないので、障壁となる。そのため、前置詞句 *of this book* の移動は三つの障壁を越えることになり、下接の条件の違反となる。その結果、(15b)は不適格な構造となり、(8b)の非文法性が説明される。

しかし、障壁による分析では、説明できない例がある。⁽⁸⁾

- (16) a. A review [of a new book [about French cooking]] came out yesterday
 b. A review t_i came out yesterday [of a new book [about French cooking]]_i
 c. *A review [of a new book t_j] came out yesterday [about French cooking]]_j

(16a)の主語の部分だけの樹形図は、(17)のようになっている。



この樹形図で注目すべきことは、 PP_1 が N_1 の、 PP_2 が N_2 の補部になっていることである。つまり、 PP_1 と PP_2 は、それぞれ N_1 と N_2 から L 標示されており、障壁にならないのである。主語 NP_1 から PP_1 が外置された(16 b)において、主語の NP_1 は L 標示されず、障壁となる。そのため、 PP_1 の移動は障壁を一つ越えるだけであり、下接の条件を満たし、(16b)の文法性が説明される。しかし、主語 NP_1 から PP_2 が外置された(16c)の場合には問題がある。この場合でも、 PP_2 の移動は、L 標示されず障壁となった NP_1 しか越えていない。つまり、(16c)の移動は、障壁を一つしか越えておらず、(16c)が誤って文法的であると判断されてしまうのである。つまり、障壁による分析では、(16c)の非文法性が説明できないことになる。⁽⁹⁾

2.3. 問題点

境界節点による分析にしろ、障壁による分析にしろ、下接の条件による統語論的なアプローチには問題がある。

主語位置にある名詞句からの PP 外置に関して、Guéron (1980) は、動詞が *appear* のような出現を表す場合、外置が容認されると主張している⁽¹⁰⁾。

- (18) a. A man t_i appeared [from India]_i
 b. *A man t_i died [from India]_i

(18)において、前置詞句 *from India* が主語位置の NP から外置されている。境界節点による分析では、移動は境界節点である主語 NP を越えるだけである。障壁による分析では、移動は障壁である主語 NP を越えるだけである。よって、これらの移動は、下接の条件を満たすことになり、どちらの分析でも、(18b)の非文法性の説明ができないのである。

(18a)と(18b)は構造的には全く同じであり、唯一違うのは、動詞だけである。つまり、動詞によって、外置が容認される場合と容認されない場合があると言える。

主語位置にある名詞句からの PP 外置に関して、Guéron (1980) は、また、動詞が目的語を含んでいる場合、外置は容認されないと主張している⁽¹¹⁾。

- (19) a. A book [by Charles] delighted Mary
 b. *A book t_i delighted Mary [by Charles]_i

(18b)の移動と同様に、(19b)の移動は、下接の条件を満たしている。よって、統語論的なアプローチでは、(19b)の非文法性が説明されないうまま残り、目的語の存在が、主語位置にある名詞句からの外置を容認しない理由を説明できない。

また、目的語からの外置に関して、Takami (1990)は、以下のような例

を挙げている。⁽¹²⁾

- (20) a. John read a book [by Chomsky] yesterday
 b. John read a book [by Chomsky] carefully

- (21) a. John read a book t_i yesterday [by Chomsky]_i
 b. *John read a book t_i carefully [by Chomsky]_i

(21)では、前置詞句 *by Chomsky* が目的語位置にある名詞 *book* から外置されている。境界節点による分析では、移動は境界節点 NP を一つ越えているだけである。障壁による分析では、目的語である NP は L 標示され、障壁にはならず、移動は障壁を一つも越えていない。つまり、どちらの分析でも、下接の条件を満たし、(21b)の非文法性が説明できないのである。

(20a)と(20b)は構造的に同一であり、両者の違いは副詞だけである。しかし、(20)からPPを外置させた(21)では、文法性が異なっている。このことから、(21a)では副詞 *yesterday* がPP外置を容認し、(21b)では副詞 *carefully* がPP外置を容認していないと言える。つまり、(21)の文法性の違いは、副詞の違いによるものである。

このように、動詞の意味や目的語の存在、あるいは、副詞の意味が、外置の条件となるのであれば、統語的なアプローチで外置を説明することができない。

3. 機能論的なアプローチ

3.1. Takami (1990)・高見 (1995)

Takami (1990)・高見 (1995)は、前節で見た統語論的なアプローチでは説明できない外置を、機能論的なアプローチを用いることによって、解決しようとしている。そのために、高見 (1995: 136)は「情報の重要度」という概念を導入している。

の重要度が低い。また、動詞句の中では、*by Chomsky*の方が*read a book*よりもより情報の重要度が高い。そのため、(23)の制約によって、*by Chomsky*が文中の他の要素よりも情報の重要度が高いので、外置が容認されるのである。一方、(24b)では、様態の副詞である*carefully*が、動詞句*read a book by Chomsky*よりも情報の重要度が高くなっている。そのため、*by Chomsky*が動詞句の中でより情報の重要度が高くても、文中で一番情報の重要度が高い副詞*carefully*があるので、その外置が容認されないのである。

3.2. 中島 (1993・1995)

中島 (1993・1995) は、以下のような例を挙げて、外置が容認される仮説を立てている。⁽¹⁵⁾

- (25) a. A man t_i died [with malignant tumors]_i
 b. *A man t_i died [with blue eyes]_i
- (26) a. A man t_i was arrested [with lots of drugs]_i
 b. *A man t_i was arrested [with a headband]_i
- (27) a. A man t_i hit Mary [who had hostility toward her]_i
 b. *A man t_i hit Mary [who was wearing a T-shirt]_i

(25a)と(25b)、(26a)と(26b)、そして、(27a)と(27b)において、異なっているのは外置された要素の内容である。つまり、外置された要素の内容が、外置が容認される場合と容認されない場合とを区別していることになり、中島 (1993: 109) は、以下のような仮説を立てている。⁽¹⁶⁾

- (28) 文の中に含まれるある情報が、その文の中で関連性が少ないほど、文

全体の容認性が低下する。

(25a)の外置要素「悪性の腫瘍をもっている」ことは、「死んだ」という述語部分と関連性があり、死んだ「理由」を説明している。しかし、一方で、(25b)の外置要素「青い眼をしている」は、「死んだ」という部分と関連性がなく、死んだ理由になっていない。その結果、(25a)の外置は容認され、(25b)の外置は容認されないのである。同様に、(26a)の外置要素「麻薬をたくさん持っている」は、「逮捕された」理由となるが、(26b)の外置要素「ヘッドバンドをしていた」は逮捕の理由にならない。また、(27a)の外置要素「彼女に敵意を抱いている」は、「メアリーを殴った」理由になるが、(27b)の外置要素「Tシャツを着ている」は、「メアリーを殴った」理由にならない。よって、(26a)と(27a)の外置は容認されるが、(26b)と(27b)の外置は容認されないのである。

3.3. 問題点

外置される要素が、残りの文中の他の要素よりも情報の重要度が高いとか、外置される要素が、残りの文中の要素との関連性が高いという、機能的なアプローチは、基本的には、正しいように思われる。しかしながら、問題がないわけではない。

Takami (1990)・高見 (1995) の分析では、外置された要素に文強勢が置かれた場合が問題になるかもしれない。(16a)と(16c)の例文において、外置される要素に文強勢を置いてみよう。

- (29) a. A review [of a new book [ABOUT FRENCH COOKING]]
 came out yesterday
- b. *A review [of a new book t_j] came out yesterday [ABOUT
 FRENCH COOKING]_j

(29a)において、前置詞句 *ABOUT FRENCH COOKING* には文強勢が置かれており、この文の中で一番情報の重要度が高くなると言える。(23)の制約に従うと、文強勢が置かれた前置詞句を外置した(29b)は、容認可能な文になるはずである。しかし、インフォーマント・チェックをしてみると、この文は非文法的であるという結果になった。よって、(23)の制約では、(29b)の非文法性が説明できないということになる。

中島 (1993・1995) が提案した「関連性」による分析の場合、関連性がどれくらいあるのかという度合いが示されていない点が問題になるかもしれない。(25)から(27)のように、関連性の度合いがはっきり対比できる場合はいいが、(16b, c) のような場合は、困るかもしれない。

- (30) a. A review t_i came out yesterday [of a new book [about French cooking]]_i = (16b)
 b. *A review [of a new book t_j] came out yesterday [about French cooking]]_j = (16c)

(30a)の外置要素「フランス料理についての新しい本の」という情報が、先行文脈「ある批評が昨日出版された」と関連づけられるなら、(30b)でも同様の関連づけがなされるはずである。そうすると、(30b)の外置要素「フランス料理についての」という情報が「新しい本の批評が昨日出版された」という先行文脈と関連づけられ、外置が適格であると誤って判断されることになる。そこで、(30a)と(30b)の対比が説明できるように、関連性の度合いをより明確に定義し、(28)の仮説を修正するか、あるいは、新しい制約を設ける必要がある。本論文では後者の立場を次節で示していく。

4. もう一つの制約

本節では、前節で取り上げた外置に関する機能論的な二つの制約に加えて、さらに別の制約があることを示していくことにする。具体的には、あ

る要素がどのような要素をどのような順番で選択するかということが、ある要素と別の要素との関連性の度合いを決める要因の一つとなることを示していきたい。

(30a, b)の文法性の相違を説明する前に、以下に示すように、一つの主要部である NP が前置詞句を二つ選択しているような例文を見てみよう。

- (31) a. A donation [of \$1,000] [to the children's hospital] was made yesterday
 b. A donation t_i t_j was made yesterday [of \$1,000]_i [to the children's hospital]_j
 c. A donation [of \$1,000] t_j was made yesterday [to the children's hospital]_j
 d. *A donation t_i [to the children's hospital] was made yesterday [of \$1,000]_i
 e. *A donation t_i [to the children's hospital] was made yesterday [OF \$1,000]_i

(31a)が示すように、名詞 *donation* は前置詞句 *of \$1,000* と前置詞句 *to the children's hospital* の二つを選択している。(31b, c)が示すように、二つの前置詞句を外置する場合と前置詞句 *to the children's hospital* を外置する場合は文法的である。一方、(31d, e)が示すように、前置詞句 *of \$1,000* を外置する場合は非文法的である。

(31b-e)の文法性の違いを、Takami (1990)・高見 (1995) の分析に当てはめてみよう。(31b)では、外置要素 *of \$1,000 to the children's hospital* が、(31c)では、外置要素 *to the children's hospital* が、他の文の要素よりも情報の重要度が高いと判断され、外置が許されていることになる。(31d)では、外置要素 *of \$1,000* が、最も情報の重要度が高いとみなされずに、外置が容認されないことになる。(31e)では、外置要素 *OF \$1,000* に文強

勢が置かれているにもかかわらず、非文となっている。

次に、(31b-e)の文法性の違いを、中島(1993・1995)の分析に当てはめてみよう。(31b)では、外置要素「子ども病院に1,000ドルの」が、先行する文脈の「寄付が昨日なされた」の説明となる。同様に、(31c)では、外置要素「子ども病院に」が、先行する文脈の「1,000ドルの寄付がなされた」の説明となる。よって、外置要素と先行する文脈で関連性があるので、これらの文が文法的であると正しく判断される。(31d, e)では、外置要素「1,000ドルの」と先行する文脈「子ども病院に寄付がなされた」と関連性が低いと認識されるため、これらの文が非文法的であると判断される。

それでは、どうして、(31d, e)の外置要素と先行する文脈の関連性が、(31b, c)のそれと比べて、低いということになるのであろうか。3.3節で指摘したように、(28)の仮説では、関連性がどの程度あるかについての判断までは言及されていない。

ここで、名詞 *donation* と前置詞句 *of \$1,000* と前置詞句 *to the children's hospital* の関係をもう一度検討してみよう。

- (32) a. A donation was made yesterday
 b. A donation [of \$1,000] was made yesterday
 c. A donation [to the children's hospital] was made yesterday
 d. OK/?/*A donation [to the children's hospital] [of \$1,000] was made yesterday

(32a)が示すように、名詞 *donation* は、必ずしも「*of* + 金額」や「*to* + 寄付をする場所」が必要なわけではない。(32b, c)が示すように、どちらか一方の要素だけでもいい。しかし、二つの要素が共起する場合、(31a)と(32d)の容認性の違いが示すように、「*of* + 金額」+ 「*to* + 寄付をする場所」という順番の方が、文の容認性がかなり高くなっている⁽¹⁷⁾。この結果から、名詞 *donation* (+ 「*of* + 金額」) + 「(*to* + 寄付をする場所)」が最も自然な語

順であり、名詞 *donation* は、この語順で二つの前置詞句を任意に選択するという語彙指定が与えられている⁽¹⁸⁾と言える。この語順が、名詞 *donation* を含む語句の意味解釈をする基準に使われていると考えてみよう。(31b)において、主語は名詞 *donation* しかなく、(32a)タイプの文だと認識される。しかし、文末にある *of \$1,000 to the children's hospital* という二つの前置詞句の順番は、名詞 *donation* が選択する最も自然な語順と一致している。そのため、この二つの前置詞句を主語の名詞 *donation* と関連づけることができ、この文が文法的であると判断される。(31c)において、名詞 *donation* は「*of*+金額」を含む(32b)タイプの文だと認識される。そして、文末の前置詞句 *to the children's hospital* は、名詞 *donation* の最も自然な語順をさらに補う要素として、主語「*donation*+*of*+金額」と関連づけられることができる。よって、(31c)が文法的であると説明できる。(31d, e)において、主語は、名詞 *donation* の最も自然な語順から「*of*+金額」を省略した(32c)タイプの文になっている。つまり、(31d, e)の主語は、「子ども病院への寄付」という意味解釈が完成されていることになる。そのため、文末に *of \$1,000* という「*of*+金額」の部分が現れても、一度解釈が終わった主語の部分と関連づけることが難しくなる。それゆえに、(31d, e)の文が非文法的であると判断されるのである。

以上の議論を踏まえて、主要部がどのような要素をどのような順番で選択するのかということが、関連性の度合いを決める要因の一つとなることが分かった。このことを取り入れて、以下のような制約を加えてみたい。

(33) 外置要素が元々含まれていた要素内の制約

外置要素が元々含まれていた要素内において、意味解釈の完成度が高いほど、外置された要素との関連性が低い。

- (a) 主要部 X が、Y と Z を語彙指定し、その順番で選択する時、(i) Y—Z の順番での外置は容認される。(ii) Y のみの外置は容認されない。(iii)

Zのみの外置は容認される。

(33ai)の場合、主要部 X だけでは、その意味解釈の完成度が高くなく、外置要素 Y-Z との関連づけが十分になされるのである。(33aii)の場合、X-Z の意味解釈の完成度が高く、外置要素 Y と関連づけが難しくなる。(33aiii)の場合、X-Y の意味をさらに補うものとして、外置要素 Z が関連づけられる。

中島 (1993・1995) が提案した「関連性」は、外置要素と先行する文脈との間を規定するものであった。一方、(33)は、外置要素が元々含まれていた要素内の制約とみなすことができる。

次に、主要部が補部と付加部を取っている構造から、外置が行われている例文を検証してみることにする。その前に、主要部 X に対して、補部 Y と付加部 Z の語順を確認してみよう⁽¹⁹⁾。

- (34) a. the student [of Physics] [with long hair]
 b. *the student [with long hair] [of Physics]

(34)において、主要部 X が名詞 *student* であり、その補部 Y が前置詞句 *of Physics* であり、X の付加部 Z が *with long hair* である。(34a)と(34b)の文法性の相違から、X-Y-Z という順番が容認され、X-Z-Y という語順は容認されないことが分かる。つまり、主要部と補部と付加部の語順は、X-Y-Z であるということになる。このことを踏まえて、以下の例を検討してみよう。

- (35) a. A review [of a new book [about French cooking]] [now on sale] came out yesterday
 b. A review _{t_i} _{t_j} came out yesterday [of a new book [about French cooking]]_i [now on sale]_j

- c. *A review t_i [now on sale] came out yesterday [of a new book [about French cooking]]_i
- d. *A review t_i [now on sale] came out yesterday [OF A NEW BOOK [ABOUT FRENCH COOKING]]_i
- e. *A review [of a new book [about French cooking] t_j came out yesterday [now on sale]]_j
- f. *A review [of a new book [about French cooking] t_j came out yesterday [NOW ON SALE]]_j

この例文で、主要部 X が名詞 *review* であり、その補部 Y が *of a new book about French cooking* であり、X の付加部 Z が前置詞句 *now on sale* である。(35b)では、X の補部である Y と付加部である Z がセットとなつて、外置されている。そのため、主要部 X だけでは意味解釈の完成度が高くなく、外置要素と関連づけられる。(35c, d)では、主語が、主要部 X と付加部 Z で構成され、「今発売中の批評」という意味解釈がすでに完成されていると言える。つまり、(35c, d)で、X-Z という語順で主語の解釈が成立しているのだから、主語と外置要素「フランス料理についての新しい本の」との関連性が成立しにくいと判断されるのである。よって、(35c, d)が非文法的であると判断される。(35e, f)では、主語が主要部 X とその補部 Y とで構成されており、「フランス料理についての新しい本の批評」という主語解釈がすでに成立している。従って、外置要素「今発売中」と関連づけが難しくなり、この文が非文法的であると判断される。この結果を、(33)の制約に組み込むと、以下のようになる。

(36) 外置要素が元々含まれていた要素内の制約

外置要素が元々含まれていた要素内において、意味解釈の完成度が高いほど、外置された要素との関連性が低い。

- (a) 主要部 X が、Y と Z を語彙指定し、その順番で選択する時、(i) Y-

Zの順番での外置は容認される。(ii) Yのみの外置は容認されない。(iii) Zのみの外置は容認される。

- (b) 主要部 X が, Y を補部として, Z を付加部として選択する時, (i) Y-Zの順番での外置は容認される。(ii) Yのみの外置は容認されない。(iii) Zのみの外置は容認されない。

最後に, 主要部 X が補部 Y を取り, Y の補部の主要部がさらに補部 Z を取るような例文を検討してみよう。これは, (16a-c)の場合であり, 前節で未解決のままであった(30a, b)の場合である。

- (37) a. A review [of a new book [about French cooking]] came out yesterday = (16a)
 b. A review t_i came out yesterday [of a new book [about French cooking]] $_i$ = (16b, 30a)
 c. *A review [of a new book t_j] came out yesterday [about French cooking]] $_j$ = (16c, 30b)
 d. *A review t_i [about French cooking] came out yesterday [of a new book] $_i$

(37)において, 主要部 X が名詞 *review* であり, その補部 Y が前置詞句 *of a new book* である。そして, Y の補部である名詞句の主要部 *book* が, 補部 Z として前置詞句 *about French cooking* を取っている。(37b)では, 主要部 X だけでは意味解釈の完成度が高くなく, 外置要素 Y-Z と関連づけがなされ, 外置が容認される。(37c)では, 主語が主要部 X とその補部 Y とで形成され, 「新しい本のある批評」という意味解釈が成立している。そのため, 外置要素 Z の「フランス料理について」と関連づけが難しくなり, 外置が容認されないのである。同様に, (37d)でも, 主語の意味解釈が X-Z で成立し, 外置要素 Y と関連づけられず, 不適格な構造となる。この結

果を、(36)の制約に組み込むと、以下のようになる。

(38) 外置要素が元々含まれていた要素内の制約

外置要素が元々含まれていた要素内において、意味解釈の完成度が高いほど、外置された要素との関連性が低い。

- (a) 主要部 X が、Y と Z を語彙指定し、その順番で選択する時、(i) Y-Z の順番での外置は容認される。(ii) Y のみの外置は容認されない。(iii) Z のみの外置は容認される。
- (b) 主要部 X が、Y を補部として、Z を付加部として選択する時、(i) Y-Z の順番での外置は容認される。(ii) Y のみの外置は容認されない。(iii) Z のみの外置は容認されない。
- (c) 主要部 X が補部 Y を取り、Y の補部の主要部が補部 Z を取る時、(i) Y-Z の順番での外置は容認される。(ii) Y のみの外置は容認されない。(iii) X-Y で意味解釈が成立していると、Z の外置は容認されない。

(38ciii)に関して、以下の例を見よう。⁽²⁰⁾

- (39) a. [The tip [of the leg t_1]] was repaired [of the dining room table]_i
 b. [The measurements [of the uniforms t_1]] were taken [of the officers but not of the enlisted men]_i
 c. [The size [of the lettering t_1]] was prescribed [on the covers of all government reports]_i
 d. [The arrival [of the planes t_1]] was announced [from New York and Philadelphia]_i

(39)の構造は、主要部 X とその補部 Y、そして、Y の補部の主要部が補部 Z を取っているため、(37c)と全く同じ構造を持っていることになる。先行研究における文法性の判断によれば、(39a-d)は全て文法的になっている。

しかし、インフォーマントチェックをしてみると、(39a-d)において、外置要素を元の位置で解釈できると判断されず、(37c)と同様に非文法的であるという結果になった。そのため、本論文では、(39a-d)は、先行研究の文法性の判断とは異なり、非文法的であるという立場を採ることにする。ただし、先行研究のように、(39a-d)が文法的であると判断する母語話者の場合、(38ciii)で規定したように、X-Yで十分意味解釈が成立していないと判断し、外置が容認されることになるのである。

5. 目的語からの外置

本節では、目的語からの外置の例をとりあげ、(38)の制約がどのように機能するかをしてみることにする。まず、主要部 X が補部 Y を、そして、Y の補部の主要部が補部 Z を取っている *a review of a new book about French cooking* が目的語になっている例である。

- (40) a. I read a review [of a new book [about French cooking]]
yesterday
- b. I read a review t_1 yesterday [of a new book [about French cooking]]_i
- c. OK/*I read a review [of a new book t_j] yesterday [about French cooking]]_j
- d. OK/*I read a review [of a new book t_j] yesterday [ABOUT FRENCH COOKING]]_j

(40b)は、主要部 X (*review*) の名詞句から、その補部 Y (*of a new book*) と Y の補部の主要部が選択している補部 Z (*about French cooking*) を Y-Z の形で外置している。そのため、X と Y-Z の関連性が高く、(38ci)に従って、文法的であると判断される。しかしながら、(40c, d)において、インフォーマントの間で文法性の判断に揺れがあったことは、注目すべき

ことである。(40c, d)を文法的であると判断する母語話者の場合、(39a-d)を文法的であると認める場合と同様に、目的語 X-Y「新しい本の批評」という意味解釈がまだ十分に完成されていないと認識し、外置要素 Z「フランス料理について」と関連づけられると判断している。一方、(40c, d)を非文法的であると判断する母語話者の場合、(38ciii)に従って、目的語 X-Y の解釈がすでに完成しており、外置要素と関連づけられないと判断しているのである。

最後に、主要部 X が前置詞句を二つ取っている *a donation of \$1,000 to the children's hospital* が、目的語になっている例を見てみよう。

- (41) a. I made a donation [of \$1,000] [to the children's hospital] yesterday
 b. I made a donation t_i t_j yesterday [of \$1,000]_i [to the children's hospital]_j
 c. I made a donation [of \$1,000] t_j yesterday [to the children's hospital]_j
 d. *I made a donation t_i [to the children's hospital] yesterday [of \$1,000]_i
 e. *I made a donation t_i [to the children's hospital] yesterday [OF \$1,000]_i

(41)の文法性の判断は、*a donation of \$1,000 to the children's hospital* が、主語の位置にあった(31)のパターンと全く同じである。つまり、(41b, c)の文法性と(41d, e)の非文法性は、それぞれ、(31b, c)の文法性の説明と(31d, e)の非文法性の説明と全く同様に説明できることになる。

(40)と(41)から、本論文で提案した(38)の制約が、目的語からの外置にも適用されることが示された。

6. 外置に関する三つの制約

本論文での議論の結果、外置に関する制約が三つあることが分かった。一つ目は、Takami (1990)・高見 (1995) が提案した情報の重要度を基準とした(23)の制約である。この制約は、外置要素が情報の重要度が高いということに着目したものである。二つ目は、中島 (1993) が提案した関連性に基づく(28)の制約である。この制約は、外置要素とその他の文中の要素との関連性に着目したものである。そして、三つ目は、本論文で提案した(38)の制約である。この制約は、外置要素が元々含まれていた要素内に着目したものである。この三つの制約が、どのように係わり合いを持つことになるのかについては、今後の課題としたい。

7. まとめ

本論文では、英語の右方移動の一種であるとされる名詞句からの外置について、外置が容認される制約を考察してみた。外置は、移動を制限する下接の条件では統一的な説明ができないことを指摘し、機能論的な制約が必要であることを示した。また、情報の重要度に基づいた制約や関連性に基づいた制約には、不備があることを指摘した。さらに、外置に関する制約として、本論文では、外置要素が元々含まれていた要素内の制約を提案した。この制約は、外置要素が元々含まれていた要素内で意味解釈の完成度が高いほど、外置要素との関連づけが難しく、文の容認性が下がるというものである。この制約により、従来の機能論的な制約では説明できない文の文法性が判断できることを示した。

注

* 本論文をまとめるにあたり、貴重な助言をいただいた佐々木淳氏に心よりお礼を申し上げたい。また、本論文で使用した数多くの微妙なデータの文法性を判断していただいた、Mark Tankosich 氏、Paul Walsh 氏、そして、John Wild 氏にも感謝

を申し上げたい。もちろん、本論文の不備な点はひとえに私の責任である。

- (1) (2)から(4)の例文は、それぞれ Akmajian (1975 : 116), Culicover and Rochement (1990 : 23), Gueron (1980 : 637)から引用している。
- (2) 名詞句からの外置の他に、英語の右方移動には、以下のような場合も含まれる。
- (i) a. John invited to the party [his closest friends]
 b. There walked into the room [a tall man with blond hair]
 c. Into the room walked [John] (Rochemont and Culicover (1990 : 1))
- (ia)は重名詞句転移(Heavy NP Shift), (ib)は提示的 there 挿入(Presentation there Insertion), (ic)は文体的倒置(Stylistic Inversion),あるいは、場所句倒置(Locative Inversion)と呼ばれている。なお、右方移動の先行研究については、参考文献を参照。
- (3) Culicover and Rochement (1990)と Rochemont and Culicover (1990)は、名詞句からの外置要素が、移動ではなく元々その場所に基底生成されていると主張している。さらに、彼らは、主語位置にある名詞句からの外置は、IPだけでなく、VPにも基底生成されると主張している。本論文では、外置に関する制約を扱うので、議論を明確にするために、外置要素の派生については、移動という立場を採っている。また、最新の生成文法理論であるミニマリスト・プログラムでは、移動は義務的であると考えられている。しかし、(2a)と(2b), (3a)と(3b),そして、(4a)と(4b)が示しているように、名詞句からの外置は義務的な移動ではなく、随意的な移動である。ミニマリスト・プログラムの理論枠組みで、名詞句からの外置がどのように扱われるかについては、本論文の枠組みを越えるものであり、本論文では扱わない。
- (4) (5)の下接の条件は、Haegeman (1991 : 365)から引用している。下接の条件は、Chomsky (1973)で提案され、それ以降、何度か修正を受けている。例えば、Chomsky (1977 : 73)では、以下のように規定されている。
- Subjacency Condition
- A cyclic rule cannot move a phrase from position Y to position X (or conversely) in the structure
- ... X... [α ... [β ... Y...]...]... X...
- where α and β are cyclic nodes
- また、生成文法の理論枠組みが、1970年代、1980年代、1990年代以降と変化してきた。そのため、本論文では、議論を明確にするために、Haegeman (1991)の下接の条件を採用している。
- (5) (8)の例文は、Akmajian (1975 : 117)から引用している。
- (6) (10)から(12)の定義はChomsky (1986 : 14, 15)から引用している。また、これらの定義に含まれている dominance と θ -government の定義 (Chomsky 1986 : 7, 15)はそれぞれ以下のようにになっている。

- (i) Dominance
 α is dominated by β only if it is dominated by every segment of β
- (ii) θ -government
 α θ -governs β iff α is a zero-level category that θ -marks β , and α , β are sisters
- その他の関連する概念については、Chomsky (1986)を参照。
- (7) (13)と(14)の定義は Chomsky (1986 : 30)から引用している。
- (8) (16)の例文は、Akmajian (1975 : 118)から引用している。Akmajian (1975 : 118)自身も指摘しているように、(16a)の主語 *a review of a new book about French cooking* において、前置詞句 *about French cooking* が名詞 *review* を修飾している解釈も考えられる。しかしながら、本論文で問題となるのは、前置詞句 *about French cooking* が名詞 *book* の補部となっている解釈の場合であり、本論文では、この場合のみを扱っている。
- (9) 前節の境界節点による分析は、(16c)の非文法性を説明できる。移動が境界節点である NP₁ と NP₂ を越え、下接の条件に違反する。よって、その移動は不適格となり、(16c)を正しく排除できる。
- (10) (18)の例文は、Guéron (1980 : 651)から引用している。
- (11) (19)の例文は、Guéron (1980 : 663)から引用している。Guéron (1980)の主張とは異なり、目的語があっても、主語からの外置が容認される場合がある。
- (i) Some guests t_1 drank milk [who had never drunk it]₁ (中島 1995 : 20)
- (ii) A new book t_1 has attracted many people [which is concerned with the origin of human language]₁ (中島 1995 : 21)
- (12) (20)と(21)の例文は、Takami (1990 : 203)から引用している。
- (13) この制約に関しては、Takami (1990 : 206)で、すでに、以下のように、提案されている。

More/Less Important Condition for Extraposition from NP

Extraposition from NP is allowed only when the extraposed element itself may be interpreted as being more important than the rest of the sentence.

- (14) Takami (1990 : 205)では、以下のような例を挙げて、時を表す副詞 *yesterday* が残りの文の要素よりも重要な情報を持っていないこと、そして、様態を表す副詞 *carefully* が残りの文の要素よりも重要な情報を持っていることを示している。
- (i) a. Did John read a book by Chomsky yesterday?
 b. Did John read a book by Chomsky carefully?
- (ia)には、二つの解釈があり、曖昧である。つまり、この質問は、「ジョンが昨日読んだのは、チョムスキー作の本か」という問なのか、あるいは、「ジョンがチョムスキー作の本を読んだのは昨日か」という問のどちらかとして、解釈される。一方、(ib)は、(ia)のような曖昧性がなく、「ジョンがチョムスキー作の本を読んだ様

- 子が注意深いかどうか」を尋ねているのである。また、否定文の場合にも、同様に、(iia)は二通りの解釈があるが、(iib)は一つの解釈しかない。
- (ii) a. John didn't read a book by Chomsky yesterday
 b. John didn't read a book by Chomsky carefully
 上記二つ以外の例については、Takami (1990 : 203-205)・高見(1995 : 135-141)を参照。
- (15) (25)から(27)の例文は、中島(1995 : 20)から引用している。また、中島(1993 : 107)も参照。中島(1993・1995)は、主語からの外置には二種類あり、(27)のような場合、外置要素は移動ではなく、その場所に基底生成されるという立場を採っている。
- (16) (28)と同様の仮説を、中島(1995 : 31)では、以下のように立てている。
- (i) ある情報が、先行する文脈に対して「説明」「含意」「強化」「対比」「理由」などの役割を演じている場合、なめらかな結合が成立する。
- (28)の仮説と(i)の仮説は、実質的に同じことであり、本論文では前者を使っている。
- (17) (31a)と(32d)をインフォーマント・チェックした結果、(31a)はインフォーマント全員が容認できると答えた。一方、(32d)は、一人が容認できない、一人がこのように言う人もいる、もう一人は(31a)と(32d)は同程度に容認できると答えた。
- (18) 名詞 *donation* と二つの前置詞句 *of \$1,000* と *to the children's hospital* の関係については、二通りの解釈が可能であると思われる。一つ目は、二つの前置詞句が名詞 *donation* の補部であると解釈する場合である。そして、二つ目は、前置詞句 *of \$1,000* は名詞 *donation* の補部であるが、前置詞句 *to the children's hospital* は名詞 *donation* の付加部であると解釈する場合である。本論文では、この問題については触れず、今後の課題とする。
- (19) (34)の例文は、Radford (1988 : 177)から引用している。
- (20) (39a-d)の例文は、Guéron (1980 : 647 注11)から引用している。

参 考 文 献

- Akmajian, Adrian. 1975. "More Evidence for an NP Cycle," *Linguistic Inquiry* 6, 115-129.
- Akmajian, Adrian and Adrienne Lehrer. 1976. "NP-Like Quantifiers and the Problem of Determining the Head of an NP," *Linguistic Analysis* 2, 395-413.
- Baltin, Mark. 1983. "Extraposition: Bounding versus Government-Binding," *Linguistic Inquiry* 14, 155-162.
- Chomsky, Noam. 1973. "Conditions on Transformations," in Stephen Anderson and Paul Kiparsky, eds., *A Festschrift for Morris Halle*, 232-286. New York:

- Holt, Rinehart and Winston.
- Chomsky, Noam. 1977. "On Wh-Movement," in Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, eds., *Formal Syntax*, 71-132. New York: Academic Press.
- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Culicover, Peter and Michael Rochement. 1990. "Extrapolation and the Complement Principle," *Linguistic Inquiry* 21, 23-48.
- Guéron, Jacqueline. 1980. "The Syntax and Semantics of PP Extrapolation," *Linguistic Inquiry* 11, 637-678.
- Guéron, Jacqueline and Robert May. 1984. "Extrapolation and Logical Form," *Linguistic Inquiry* 15, 1-31.
- Haegeman, Liliane. 1991. *Introduction to Government and Binding Theory*. Oxford: Basil Blackwell.
- 長谷川欣祐・河西良治・梶田幸栄・長谷川宏・今西典子. 2000. 『文(I)』東京：研究社.
- Huck, Geoffrey and Younghee Na. 1990. "Extrapolation and Focus," *Language* 66, 51-77.
- Kuno, Susumu and Kenichi Takami. 1993. *Grammar and Discourse Principles: Functional Syntax and GB Theory*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Nakajima, Heizo. 1984. "COMP as a Subject," *The Linguistic Review* 4, 121-152.
- Nakajima, Heizo. 1989. "Bounding of Rightward Movements," *Linguistic Inquiry* 20, 328-334.
- 中島平三. 1993. 「連載・生成文法再入門(10)生成理論と関連性理論」『言語』22巻12月号, 104-110.
- 中島平三. 1995. 「主語からの外置：統語論と語用論の棲み分け」高見健一(編)『日英語の右方移動構文—その構造と機能—』, 17-35. 東京：ひつじ書房.
- 西原俊明. 1993. 「右方移動現象と束縛経路理論の問題点」福岡言語学会編『言語学からの眺望 福岡言語学研究会20周年記念論文集』, 115-127. 福岡：九州大学出版会.
- Radford, Andrew. 1988. *Transformational Grammar: A First Course*. London: Cambridge University Press.
- Reinhart, Tanya. 1980. "On the Position of Extraposed Clauses," *Linguistic Inquiry* 11, 621-624.
- Rochemont, Michael and Peter Culicover. 1990. *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ross, John. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Ph. D. dissertation, MIT.

- Saito, Mamoru and Naoki Fukui. 1988. "Order in Phrase Structure and Movement," *Linguistic Inquiry* 29, 439-474.
- 田子内健介・足立公也. 2005. 『右方移動と焦点化』東京：研究社.
- Takami, Kenichi. 1990. "Remarks on Extraposition from NP," *Linguistic Analysis* 20, 192-219.
- Takami, Kenichi. 1992. "On the Definiteness Effect in Extraposition from NP," *Linguistic Analysis* 22, 100-116.
- 高見健一. 1993. 「名詞句からの外置と定性効果」『英語青年』138巻, 1月号, 22.
- 高見健一. 1995. 『機能的構文論による日英語比較』東京：くろしお出版.